

Homage

Dr. Takeo Doi (1920–2009)

去る2009年7月5日、教育研究所元所員であられた
土居健郎元教授（医学博士）（89歳）が逝去されました。

研究所といたしまして、ここに謹んで哀悼の意を表します。

Dr. Takeo Doi, former member of IERS and former Professor of Psychology,
passed away on July 5, 2009.

IERS expresses its condolences.

David W. Rackham
Director of IERS

土居健郎先生に感謝をこめて

In Gratitude to Prof. Takeo Doi

苫米地 憲昭 TOMABECHI, Noriaki

● 国際基督教大学
International Christian University

土居健郎先生は2009年7月5日89歳でご逝去されました。10月12日に「土居健郎先生を偲ぶ会」が都内のホテルでもたれ、約500名の人々が集いました。

土居先生は、本学には東京大学ご退官後、1980年4月～1982年12月までの3年弱の間心理学の教授としてご勤務されました。土居先生は、カウンセリングセンターとクリニックの顧問医も兼務され、カウンセリングセンターには、毎週火曜と木曜の午前に来られて、学生たちの診察、指導とわれわれカウンセラーのスーパービジョンをしてくださいました。

2年弱の間でしたが、私は土居先生の下で仕事をしながら教えるという幸運に恵まれました。当時、精神病院勤務から大学のカウンセリングセンターという新たな職場に移ったことで私は緊張した日々を過ごしていましたが、それ以上に土居先生の傍に居るといふことの緊張の方が明らかに大きいものでした。その頃の心境をカウンセリングセンターの報告書に「只今修行中」という題でエッセイに書いたことがあります。土居先生ショックと言ってもいいかもしれません。そのエッセイの内容を少しだけ紹介します。

「私は土居先生の傍にいて、いつの頃からか『おそれの気持ち』を抱くようになっていた。しかし、その圧迫感・緊張感について、相手が国際級の精神分析家と評される巨人であれば仕方のないことだ、自分は修行中の身なのだからと諦めていた。しかしあれこれと考えながら土居先生の著書を繙くうちに、患者と治療者の関係は治療者と教

育監督者の関係にあらわれるということが論じられている箇所にもぶつかった。『治療者の治療関係における盲点はしばしば治療者の監督者に対する態度・関係の中に認めることができる』と明言されている。しかもどことなく私に似たタイプの治療者についても取り上げ論じられているではないか。そこを読んだ時、私はこの土居先生への『おそれの気持ち』を単に畏敬の念に由来するものとして片づけるわけにはいかないと思うようになった。そこで改めて、この感情に視点を移してみた。(以下略)

このエッセイは、「さて以上の経験を通して私は、土居先生が何故かくも誤魔化しを徹底的に排除し、一つひとつ真実をみることを大切にされるかということの意味が僅かながらもわかりかけてきた気がするのである」と結んでいます。

土居先生は本当に威厳のある先生でした。先生にケースのことで何うとそれはこうしなさいと具体的に教えてくださいました。たとえば、「1年生の女子学生が授業中に突然叫んで教室を飛び出して行った」という出来事がありました。しばらくして、この学生のことで、新入生リトリートの担当の教員から、リトリートのときに彼女に対して特に注意しなければならないことを教えてほしいと電話がかかってきました。このことを土居先生にご相談したときに言われたことが、今でも印象深く記憶に残っています。土居先生からの答えは「よく見ておいてくださいと言いなさい」という極めて簡単なものでした。再びその教員から電話がかかってきたときに、そのとおりに伝えると、

安心したように「わかりました」という応答があったのは、不思議でした。おそらくこの一言によって、その教員は不安な気持ちではなく、落ち着いてこの学生を見守ることができたのだと思います。土居先生には、人間心理の本質を洞察している叡智のようなものをいつも感じました。事例検討会で土居先生が発言されるときに精神分析用語が使われることはほとんどありませんでした。平易な言葉でしたが指摘されてみると、なるほど納得せざるを得ないことばかりでした。それは、他の者には見えていない盲点を明らかにしているからだったと思います。

最近届いた日本精神衛生学会の機関誌『こころの健康』に、本学名誉教授野命先生他多くの方が追悼文を寄せられています。熊倉伸宏氏の追悼文に今まで伺ったことがないエピソードが紹介されていました。熊倉氏が最後にお会いになったときに土居先生が語られたことです。

「僕はね、医学部4年のとき、9月に繰り上げ卒業で徴兵されるはずだった。軍医の面接のときに宗教欄にキリスト教と書いた。徴兵検査で『戦争をどう思うか』と聞かれて、戦争に反対とは言えないから、ただ、『悪いことだと思う』と答えた。1時間も怒られた。それで二等兵で徴兵となった。それでは酷いので、軍医の予備のコースにまわることにした。二等兵から一つひとつ上がっていく。大変だったよ。あのころは苦しかった。予備役の軍医だったから。」

このエピソードは、土居先生がホイベルス神父との出会いや信仰について語られている中の一部です。したがって、必ずしも話の焦点がこのエピソードにあるわけではないのですが、あの時代に「戦争は悪いことだと思う」と答えられたということに私は衝撃を受けました。そこには若いときから変わらない毅然とした土居先生のお姿を見る思いがします。このような姿勢は、とても真似できないものですが何か少しでも取り入れたいという思いに駆られます。

本学でも多く学生が土居先生から影響を受けました。「ICU心理臨床家の集い」という卒業生の会があり毎年例会をもっていますが、1999年2

月の集いに土居先生にご出席いただき座談会をしたことがあります。テーマは「臨床家としての姿勢」というものですが、「自分の限界を知ることの大切さと権威の問題」「治療の枠組みと一人の人間であることのジレンマ」などについて非常に示唆に富む教えをいただくことができました。

私は、大学院の授業で毎年土居先生の著された『方法としての面接』を読んでいます。この本は名著の誉れ高く、どちらかと言えば小さな版の本ですが読み込むほどに奥の深さを感じます。学生たちに土居先生から直に教えたいいただいたことを少しでも伝えたいと考えています。

土居先生には厳しさを感じると同時に周りはいつもほっとし、ときには爆笑するようなユーモアに包まれました。都留春夫先生の還暦祝いの集まりのとき、土居先生が「都留先生と私には共通点があります。それはふたりとも屈折しているところがあることです」とスピーチの冒頭で言われたので、皆がどっと沸きました。皆の笑いの裏には、何か性格的に屈折しているということでも話されるのではないかという期待があったのだと思います。その後で話された屈折の意味は、おふたりとも途中で進路変更をされているということであり、人生には紆余曲折があるという含蓄のあるお話でした。

土居先生の訾咳に接する機会が与えられたことに感謝申し上げると同時に、ご冥福を心よりお祈りいたします。